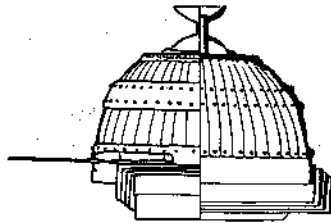


紀 要

第 4 号



1990. 12

財団法人 滋賀県文化財保護協会

17. 琵琶湖周辺の遺跡について

濱 修

1. はじめに

滋賀県は、その総面積の5分の1を琵琶湖がしめている。古代から、この琵琶湖を抜きにして人々の生活は考えられなかつただろうし、琵琶湖のおかげで人々は多くの富を得てきただろう。

そうした人々の痕跡は、現在琵琶湖湖底遺跡として水面下に存在している。近年、琵琶湖総合開発の事前調査で多くの遺跡が水面下から姿を現した。深いものでは水面下4m近くから縄文時代の遺跡が見つかっている。

この湖底遺跡の存在は多くの謎を含んでおり、その成立原因には多くの見解が有る。本論ではその成立原因もさることながら、湖底遺跡の特徴を検討する事で、遺跡の変遷と、人々との関わり合いについて検討をしてみたい。

2. 水位の変動と遺跡の変化

琵琶湖の水位の変動と遺跡の存在について、現在までの調査で明確な遺構の存在が確認された代表的な遺跡では、縄文時代早期末の集石炉跡が検出された赤野井湾遺跡が80.80m付近に存在し、弥生時代前期の住居跡が検出された針江浜遺跡では81.70m付近に位置する。

琵琶湖周辺の湖底や湖岸、旧内湖、瀬田川沿岸に存在するいわゆる湖底遺跡と呼ばれるものは現在100遺跡をこえている。その中で主な遺跡を地域別にみてる。

湖南では瀬田川沿岸に多くの遺跡が有る。石山貝塚は縄文時代早期末のタイプサイト、で貝塚や集石炉、人骨等が出土している。唐橋遺跡は現在の唐橋から約80m下流の水面下3.5mで壬申の乱当時から橋脚遺構が発見されている。橋脚の基礎構造の構築技術から考えると当時の水位の低下を考えざるをえない。瀬田川河口の粟津湖底遺跡では81m～81.5m前後から縄文時代早期から中期にかけての大貝塚が発見されている。

南湖の東岸では志那湖底遺跡で縄文時代晩期の土器棺墓が82.5m前後から発見されている。その北に位置する津田江湖底遺跡では縄文時代前期の土壙が81.5m付近から検出されている。琵琶湖に半島状にのびる烏丸崎遺跡は弥生時代前期から中期を中心とする玉造工房や方形周溝墓群が現在の水面下50cm前後で発見されている。守山市の小津浜遺跡でも弥生時代前期から中期を中心とした集落跡が83.50m付近で発見されている。赤野井湾遺跡では縄文時代早期から平安時代にかけての湖底湖岸における複合遺跡である。

湖東地域では長命寺湖底遺跡で81.8mで縄文時代晩期の丸木舟と多くの土器が出土している。旧内湖の水茎遺跡では縄文時代後期の土器片とともに丸木舟が7艘が水田用暗渠排水掘削作業中に発見されている。同じく旧内湖の干拓中に発見された大中の湖南遺跡は県下でも大規模な弥生時代の集落で、これも現在の水面下1.3m付近に位置する。彦根市の沖合の孤島である多景島湖底

遺跡は平安時代を中心とした多くの遺物が出土している。彦根市の松原内湖遺跡では81.8m前後で縄文時代後期・晩期の丸木舟が多数出土し、83m付近で弥生時代中期の土坑がみられるほか、縄文時代からの多くの土器や木製品が出土している。

湖北地域では、米原町の旧内湖である入江内湖遺跡及びその周辺の磯山城遺跡、入江内湖西野遺跡などが有る。磯山城遺跡では縄文時代早期末の埋葬施設が発見され、西野遺跡では古墳時代の集落跡が旧汀線付近から検出されている。湖北町の延勝寺湖底遺跡では弥生時代中期の水田跡と思われる水路が82.6m付近で見ついている。同じく湖北町の尾上遺跡と尾上浜遺跡では、旧湖岸の砂浜上に斉串等の祭祀用の木製品が多く出土しているほか、尾上浜遺跡では80.9m付近で縄文時代後期の丸舟が出土している。また、葛籠尾湖底遺跡では深い所で水深70m付近から縄文時代早期から平安時代までの完形品に近い土器や、石器などがみついているが遺跡の性格については湖底の深い位置から遺物が出土するため不明確な点が多い。

湖西地域では新旭町の針江浜遺跡で弥生時代前期から中期の集落跡が検出されているほか、弥生時代中期の地震による噴砂跡もみついている。また、森浜遺跡では古墳時代初頭の多くの土器のほか琴なども出土している。堅田の浮御堂遺跡では平安時代を中心とした多くの遺物が出土して、唐崎遺跡では奈良時代の祭祀遺物が採集されている。

これらの遺跡はおもに明確な遺構が検出されているものが中心である。縄文時代のおもな遺跡は概ね83m以下に存在し、弥生時代の遺構は82.5m～84m以内に存在するものが多く、それより深い位置に存在する遺跡は針江浜遺跡など北部に位置することが特徴的である。

3. 遺跡の性格と分類

これらの遺跡は時代別、遺構のあり方など個々ばらばらであるが、それぞれの特徴から遺構の性格を分類してみたい。

まず、遺跡が日常生産活動の場である物をAタイプとする。

その中で住居・漁撈・水田・墓など定住生活をしている遺跡をA Iとすると、この様な遺跡には縄文時代では石山貝塚・栗津貝塚がある。いずれも住居跡はみつからないがかなり長期に、また大量の貝殻が投棄されていることから必ず貝塚の周辺に住居を構えて定住していたものと思われる。弥生時代では針江浜遺跡が前期の竪穴式住居・掘立柱建物のほか、中期の水路は水田に利用されていたものと思われる。また、大中の湖南遺跡では貝塚・水田・方形周溝墓の存在とそれに対応する住居跡の存在が推定されている。また、小津浜遺跡でも前期から中期のピット群・方形周溝墓・水田跡等が検出されていることからA Iタイプに相当する。

これらの遺跡は一代以上に渡って生活し定住していたものと思われる。縄文時代には居住に適した生活環境が確保され、豊富な魚介類が容易に採集できていたであろうし、弥生時代では稲作の獲得により環境や自然条件を変化させる事で定住化の道を見いだしていったものである。しかしその数は限定されたものである。

次に、生産活動の場でも居住を伴わない遺跡で湖岸周辺を利用したものをあげてみる。まず漁撈生活に利用していたと思われる遺跡をA II Iタイプとする。縄文時代早期の集石炉が検出され

ている赤野井湾遺跡は、集石炉で琵琶湖の魚を焼いて食べていたものと思われる。また、尾上浜遺跡では弥生時代の梁跡と思われる木組みが見つかったがこれも琵琶湖の魚資源を確保しようとしたものであろう。弥生時代以降になると湖岸の低湿地を利用した水田遺構が見られる。これをA II 2タイプとする。延勝寺湖底遺跡水路と農具、古墳時代になるが赤野井湾遺跡の木製農具と足跡群などこのタイプの遺跡である。

次に墓地を考えてみる。墓地には墓域を形成する(B I)ものと、単独(B II)のものが見られる。

墓域の範疇は複数以上の出土を対象とするが、縄文時代晩期に志那湖底遺跡で湖岸から湖中にかけて5基の土器棺墓が検出されている。砂洲の微高地が帯状に湖中に延びていることから、その砂洲上に墓域を形成しているものと思われる。弥生時代中期に烏丸崎遺跡では数十基以上の方形周溝墓群の存在が確認されているが、この遺跡の立地条件も湖中に突き出した半島の微高地上に墓域を形成している。次に明確な墓域を形成する事無く単独で出現するものは、縄文時代早期末の埋葬施設から2体の屈葬人骨が出土した磯山城遺跡、縄文時代前期の朱塗りの浅鉢で蓋をした深鉢が出土した津田江湖底遺跡の土壇も埋葬施設と思われる。

第3に交易・交通の場としての性格を持つ遺跡である。

C Iタイプとして交易・交通の基地で物資の集積・拡散をしていた遺跡である。尾上浜遺跡の丸木舟は眼前の竹生島・葛籠尾崎や周辺との交通手段として利用しものであろう。入江内湖遺跡では明確な遺構が見つからないが出土遺物の多さや立地条件から港湾施設的な役割を果たしていたと思われる。隣接する松原内湖遺跡はそうした性格は明確である。縄文時代から弥生時代を中心に大量の遺物が出土している。さらに縄文時代後期から晩期にかけての丸木舟が多数出土している。この地方の重要な交通拠点であったであろう。丸木舟の出土は湖東の長命寺湖底遺跡や水荃遺跡にもある。沖の島や周辺の集落、対岸の村むらとの交易に使っていたものであろう。時代は下がるが赤野井湾遺跡では白鳳時代の瓦80点があたかも運搬途中の事故の状態出土している。水上交通を利用したの運搬であったであろう。

次にC IIタイプとして交通の要衝にある遺跡として唐橋遺跡がある。瀬田川の湖上交通ばかりか、実質上の畿内を守る重要な拠点であった。その他、水上交通の要点としては大津・堅田の浮御堂遺跡・大溝・今津・海津・大浦・塩津・朝妻筑摩・彦根・粟浦・矢橋など近世まで数多く見られる。

最後に水辺の祭祀を伴う遺跡Dタイプとし、古墳時代的な祭祀をD I、律令的な祭祀形態をD IIとする。

前者には小津浜遺跡の湖岸部分で古墳時代の土坑状の遺構に多量の手捏土器が出土した。同じく小津浜遺跡のやや内陸よりでは古墳時代中期の河道から須恵器や土師器の完形品とともに鉄製の鎌・刀子等が密集して出土している。赤野井湾遺跡の古墳時代後期の溝の肩部分からは土製人形・手捏土器・火鑽板・焼け石などが出土した。また、他の溝からは舟形木製品が出土している。草津市の湖岸に近い北萱遺跡でも河道の中から舟形木製品や須恵器・土師器・丸玉等がまとまって出土している。いずれも古墳時代の物であるが古墳の祭祀を行えなかった民衆の水霊に対する祭祀であろう。

律令的祭祀は古墳時代的な祭祀に変わり新たに中国から伝わった祭祀形態を律令国家が取り入れ、

地方の民衆に伝わったものである。尾上遺跡・尾上浜遺跡では木製の人形・斉串・馬形等が出土している。いずれも竹生島に沈む夕日に向けて祓に用いられたものであろう。唐崎遺跡は奈良時代の土馬・手捏土器等が採取されている。平安時代には七瀬祓所として知られる。浮御堂遺跡で出土した和鏡も水霊信仰であろう。また、唐橋遺跡なども祓所的な性格を持っていたと思われる。

4. まとめ

琵琶湖周辺の遺跡には様々な遺跡があるが、その特徴的なことをまとめてみたい。

縄文時代には石山・栗津等の貝塚が発達するがそれは南湖の一部に限られていた。遺跡の形成も一時的なものに限られ、漁撈や墓地に利用した。しかし、琵琶湖東岸においては縄文時代後・晩期には多数の丸木舟を持った集団が出現し縄文的交易活動を活発に行っていたものと思われる。縄文時代晩期になると南湖においては墓域を伴った遺跡が現れる。

弥生時代に入ると湖岸周辺は活発に利用されたものと思われる。集落を伴った水田耕作と方形周溝墓群が出現し、縄文時代の漁撈・採集社会から稲作による集団社会と変化した。しかし、弥生時代後期になると集落の存在は内陸部に限られてくる。

古墳時代になると湖岸は水田や交通の場とともに古墳の祭祀を行えない人々による水霊信仰の場としても利用される。更に、古墳時代後期には内陸部の大規模開発に伴い水田もとうごかる。

そうした性格は律令社会にはいつても窺われ、奈良時代には日本海と平城京の交易活動の手段としても利用される。さらに新たに禊・祓等の祭祀の場としての性格も出現する。

中世・近世においては湖上交通はおおいに利用される。各時代共通してこの湖上交通は重要な役割を果たしてきた。

参考文献

- ・『文化財調査出土遺物仮収納保管業務発掘調査概要』(昭和62年度・63年度・平成元年度)(滋賀県教育委員会・滋賀県文化財保護協会 1988年、1989年、1990年)
- ・『びわ湖と埋蔵文化財』(水資源開発公団 1984年)
- ・『謎の湖底遺跡を探る』(滋賀県立風土記の丘資料館 1988年)
- ・「琵琶湖湖底遺跡の調査の現状」(『紀要』第1号)(滋賀県文化財保護協会 1988年)

湖底遺跡の分類表

	縄文時代					弥生時代			古墳時代			白鳳時代	奈良時代	平安時代	
	早	前	中	後	晩	前	中	後	前	中	後				
A	I	石山	栗津			小野浜 鈴江浜	大中								
	II ₁	新野井				尾上浜									
	II ₂						延勝寺					新野井			
B	I				志那		島丸								
	II	珠													
C	I				尾上浜 松原 長命 水琴				青浜			七瀬			
	II											唐橋			浮御堂
D	I									小野 赤野 北	浜 中 島				
	II											尾上 唐崎 唐橋			

編集後記

本年度は協会設立20周年。これに伴う展示会や記念誌の発行等色々な事業を実施した。本号も20周年を祝う意味で、職員全員の投稿を呼びかけたところ、ほぼ全員の27名の参加を得、発刊することができた。紀要の充実はみんなの頑張りによるところが大で、次号以降も編集者を悩ませるほどの投稿を期待したい。

平成2年12月

紀 要 第 4 号

編集・発行 財団法人 滋賀県文化財保護協会
大津市瀬田南大萱町1732-2
Tel(0775)48-9780・9781

印 刷 宮川印刷株式会社
大津市富士見台3番18号
Tel(0775)33-1241